本学蔵東海道関係浮世絵（四）

―川崎宿および神奈川宿界隈―

山下　琢巳

はじめに

東海道の最初の宿品川を抜け、さらに大井村、大森村、蒲田村を抜けると多摩川に至り、六郷の渡しを越えると次の宿川崎となる。品川宿から約二里半、この川崎宿から鶴見村、生麦村を越えていくと神奈川宿に至る。神奈川宿も川崎宿から約二里半の所に位置する。

本稿では、江戸時代末期の川崎宿と神奈川宿界隈の様子を資料によって辿り、それが、本学蔵の浮世絵では、どのように絵画化されているかを探る。

扱う資料は、ロバート・フォーチュンの『江戸と北京』の記述を中心とする。幕末に来日したイギリス人は、川崎宿や神奈川宿の様子をどのように描いているのか。日本側の資料とも比較して、ヨーロッパ人の見た東海道という視点から考察を行う。

Ⅰ　ロバート・フォーチュン『江戸と北京』

ロバート･フォーチュン（Robert Fortune）､1812年9月16日､スコットランド（Scotland）のバーウィックシャー（Berwickshire）で生まれる。エジンバラ王立植物園（Royal Botanic Garden Edinburgh ）で修行の後､園芸の才能を認められてロンドン園芸協会（Horticultural Society of London）にチズウィック庭園（Chiswick Garden）の温室管理責任者として雇われる。そして、1842年、30歳の時に、ロンドン園芸協会の植物収集遠征隊の一員に選ばれる。1843年2月26日英国を出発､約4ヵ月後の7月に前年の南京条約によって植民地となった香港に到着し、1845年12月まで滞在する。フォーチュンは、プラントハンター（Plant hunter 植物収集探検家）としてキク、ラン、ユリなど東洋の代表的観賞植物２５０種を当時発明されたウォードの箱（Wardian case）と呼ばれる小さな温室（Terrarium）などに入れてイギリスに持ち帰った。そして､この中国滞在の記録を『中国北部をさまよった3年間』（*Three Years' Wanderings in the Northern Provinces of China,* London, 1847）と題して公刊する。その後､フォーチュンは､東インド会社の求めに応じて1848年および1853～56年、アメリカ政府の要請で1858～59年にも中国に赴いた。この間、フォーチュンは、中国の20,000株の優良なチャノキ苗をダージリン地方へ移植するのに成功し、インドとセイロンでの茶産業興隆の礎を築いた。この間の事跡は、『お茶の国、中国を訪ねて』（*A Journey to the Tea Countries of China,* London, 1852）および『中国人とともに暮らす』（*A Residence Among the Chinese,* London, 1857）というフォーチュンの二冊の著作によって知ることができる[1)]。

当時のヨーロッパ人は、日本を中国とならんで未知の植物が多数存在する緑の宝庫と考えていた。その日本は、1858年に、米・蘭・露・英・仏と修好通商条約を締結し、翌年には、横浜・長崎・箱館の三港を開港する。

プラント・ハンティング先進国のイギリスでは、まず、1859年、長崎領事事務取扱（後ち

に箱館領事）となったクリストファー・ペンバートン・ホジソン（C. Pemberton Hodgson 1821-1865）が来日する。ホジソンは、１年半ほどの滞在中に、長崎ではツバキ、ツツジ、ユキノシタなどを採集し、箱館赴任後は多くの植物を採集して、王立キュー・ガーデン（Royal Botanic Gardens, Kew）園長のウィリアム・ジャクソン・フッカー（Sir William Jackson Hooker 1785-1865) の元に、日本の植物事情と標本 1,500 種を提供した[2)]。

翌年の 1860 年には、ロンドンの大園芸会社ヴィーチ商会のジョン・グールド・ヴィーチ（John Gould Veitch 1839-1870）が、日本の開国を聞きつけて急遽来日する。ヴィーチは、日本で、美しい観賞用の植物およびイギリスの気候に耐えうるシダ類（当時イギリスではシダの栽培・観賞が大流行していた）の採集、漆器の材料となるウルシおよび和紙の原料になる植物の調査などを行った。また、ヴィーチは、初代駐日特派全権公使のオールコック（Sir Rutherford Alcock 1809-1897)[3)] とともに外国人初の富士山登頂を達成し、「富士山植生分布図」を作成した。

そして、ヴィーチに遅れること３ヶ月、プラントハンターとしての名声を博していたロバート・フォーチュンが日本に上陸する。フォーチュンを乗せて清国を出帆した小帆船マーモフ号は、1860 年 10 月 12 日、長崎港に到着する。長崎遊覧の後、フォーチュンは、10 月 19 日に長崎を出港し、10 月 30 日に横浜港に到着する。神奈川に１ヶ月半ほど滞在して植物採集を行い、1860 年 12 月 17 日に、汽船イングランド号に多数のウォードの箱を積み込んで横浜を出港、12 月 29 日に、長崎港からシナに向けて出帆し、1861 年１月２日に上海に到着した。そして、およそ３ヶ月後の 1861 年４月、スコットランド号に乗船して上海を出航し、途中長崎に寄港して、4 月 20 日に横浜で下船、ふたたび神奈川に居を構えて植物採集を行う。３ヶ月強の滞在後、1861 年７月 29 日に、フィヤリー・クロ号に乗船して横浜を船出し、８月４日に上海に戻った。

フォーチュンは、この２度の日本滞在の記録を『江戸と北京』（*Yedo and Peking*：*A Narrative of a Journey to the Capitals of Japan and China*, London, 1863）として出版する。日本に魅せられたフォーチュンは、この書のなかで日本人の国民性を次のように述べている[4)]。

花好きな国民

> 日本人の国民性のいちじるしい特色は、下層階級でもみな生来の花好きであるということだ。気晴らしにしじゅう好きな植物を少し育てて、無上の楽しみにしている。もしも花を愛する国民性が、人間の文化生活の高さを証明するものとすれば、日本の低い層の人びとは、イギリスの同じ階級の人達に較べると、ずっと優って見える。
>
> A remarkable feature in the Japanese character is, that, even to the lowest classes, all have an inherent love for flowers, and find in the cultivation of a few pet plants an endless source of recreation and unalloyed pleasure. If this be one of the tests of a high state of civilization amongst a people, the lower orders amongst the Japanese come out in a most favourable light when contrasted with the same classes amongst ourselves.

ヨーロッパでは見ることのできない美しくかつ有用な植物を収集するために、日本を訪れ

たフォーチュンは、その目的を果たす過程で、日本の庶民文化に触れる。フォーチュンの『江戸と北京』には、日本の自然植生や当時の園芸事情がつぶさに記されるとともに、また、日本独自の文化や風俗習慣が、西洋文化を絶対視しない相対的な立場から書き留められている。

Ⅱ　神奈川宿

欧米列強は、日本との修好通商条約で、すでに神奈川湊を擁する神奈川に新港を開くことを指定した。そのため幕府が、横浜を開港地として整備を進めた後も、条約諸国は、暫くの間、その領事館を神奈川に置いていた。神奈川に到着したフォーチュンは、シナのデント商会（Dent & Co.）の支配人で、ポルトガルとフランスの領事を兼ねる旧友ジョセフ・ローレイラ（Jose Loureira）が駐在していた慶運寺内に滞在する。この寺は、江戸への人馬の往き来の最も激しい東海道の路地を入ったところにあった。

神奈川宿は、江戸日本橋より七里（約 27.5㎞、約 17.1mile）、女性を伴った旅の場合、この宿で一泊した。『江戸名所図会』（斎藤長秋・莞斎・月岑編、長谷川雪旦画、前半 1–3 巻 10 冊は天保 5 年・1834・刊）には、「此地はいづれも海岸に臨みて海亭をまうけ往来の人の足を止む。此海辺を袖の浦と名づく」と記される。このあたり、東海道は、海に沿って通り、海側には、旅籠屋をはじめとして、茶屋や料理屋が軒を連ねていた。そして、高級料理屋では、袖の浦で捕れる新鮮な魚が旅人に供されていた。

フォーチュンは、神奈川宿について、まず、次のように記している。

神奈川宿

神奈川は江戸湾の海岸に沿って、数マイルつづく細長い町で、日本の国道である東海道の主要な宿駅の一つである。昔のオランダ旅行者の紀行によると、戸数が約六百戸散在し、江戸から二四マイルあるという。これは江戸の真中にある日本橋からの凡その距離で、日本橋を起点として、日本各地への距離が測量されたのである。だから神奈川は江戸の西端ずれからは、一七（ママ）－一八マイルぐらいに過ぎなかった。神奈川宿には宿屋や茶屋が何軒もあって、かつてオランダ人が、長崎から江戸に向う道中の最後の一夜をここで明かし、翌日江戸に入ったものである。

Kanagawa is a long narrow town stretching for several miles along the shore of the bay, and having one principal street, and that the *Tokaido* or great highway of Japan. The place is mentioned in the books of the old Dutch travellers, and is said by them to contain about six hundred houses, and to be twenty-four miles from the capital. It is probably about this distance from the *Nipon Bas*, or bridge in Yedo, from which distances are measured to all parts of the empire ; but it is not more than sixteen or eighteen miles from the western end of the city of Yedo. It contains a great number of inns and tea-houses ; and here the Dutch generally slept on the last night of their journey overland from Nagasaki to Yedo. On the following day they entered the capital.

かつてドイツ人のケンペル（Engelbert Kaempfer 1651-1716）は、日本に滞在中、オラン

ダ商館長に従って、1691年と1692年の二回、長崎の出島から江戸に参府した。その時の様子は、『日本誌』（原名“*Geschichte und beschreibung von Japan*”）に記録されている[5)]。この書は、ケンペルの死後11年後の1727年に、ヨーハン・カスパル・ショイヒツァー（Johann Gaspar Scheuchzer）による英訳本がはじめて“*The History of Japan*”と題してロンドンで出版されベストセラーとなる。この英訳本ははやくも翌年に再版され、下って1833年には簡略本が出された。ケンペルの『日本誌』は、時代が隔たっているとはいえ日本についての数少ない知識を得ようとする欧米人にとって依然必読の書であった。ケンペルの記述を踏まえた後、フォーチュンは、神奈川宿の店の様子と街道に続く裏の小道に点在する寺院について記す。

店と寺院

街道筋の店屋は概して貧弱で、わずかな生活必需品のほかには品物は余りなかった。街道の裏の小道から町につづく途中の所々に、仏教寺院や墓地がある。これらの寺は、神奈川にある建物の中では最も立派で堅牢で、最良の地域を占めている。時には境内に日本人好みの花をいろいろ栽培した庭もある。条約国の領事らが仮領事館として駐在したのも、これらの寺である。善良な僧侶たちは、自分の寺を没収され、放逐された迷惑に対して、十分な代償を払って貰えば、彼ら自身のため、仏のために次の住居を探すのに反対はしなかった。

The shops are generally poor and mean, and contain few articles except the mere necessaries of life. A little way back from the main street, at intervals all the way along the town, are Buddhist temples and cemeteries. These temples are often found in the most charming situations, and they are the finest and most substantial buildings in Kanagawa. In some instances they are surrounded with pretty gardens, containing specimens of the favourite flowers of the country. It is in some of these temples that the consuls of the Treaty powers have been located. The good priests do not object to find quarters of an inferior kind both for themselves and for their gods, providing they are well paid for their trouble in turning out.

神奈川宿を往還する東海道筋の長延寺にはオランダ領事館、宗興寺にはイギリス領事館、本覚寺にはアメリカ領事館が置かれていた。仮領事館として善良な僧侶から没収した寺のひとつに仮住まいしたフォーチュンは、外国領事館となった寺々に栽培された花を見て回る。そんななかフォーチュンが最も驚嘆したのが、東海道を仰々しい壮大な行列を組んで権力と富を誇示しながら進行する大名行列の多さであった。

大名行列

日本の国道である東海道は終日、江戸から往き返りする人々で賑わっていた。時々、従者や武装した家来の長い列が、何マイルも続くような大名行列に出会う。このような行列が通過するのに、二・三時間も掛るのはまれではない。数人の先触れの徒士がやって来て、貴人のお通りだから土下座するようにと、大声で知らせる。この先触れは効果

的で、人々は立ちどころに道の両側に平伏したまま、大名の乗物ー駕篭ーが通り過ぎるまで、その姿勢を崩さない。大名行列は次の様式で構成されている。最初に大名の駕篭が通り、大名の馬に続いて、刀、槍、火縄銃を持った家来が従い、それから多数の足軽が、おのおの二つの塗物の箱を竹竿で担いで来る。その後から、高級の役人の乗った駕篭が来る。それからまた箱を持った多勢の足軽や家来がつづく。随員達の数はおびただしいものであるが、それは大名の富と格式によって左右されるに相違ない。

The Tokaida, or great highway of the country, is thronged all day long with people going to or returning from the capital. Every now and then a long train of the servants and armed retainers of one of the Daimios − lords or princes of the empire − may be seen covering the road for miles. It is not unusual for a cortege of this kind to occupy two or three hours in passing by. Men run before and call upon the people to fall down upon their knees to do honour to the great man, nor do they call in vain. All the people on both sides of the way drop down instantly on their knees, and remain in this posture until the norimon or palanquin of the prince has passed by. A *Daimio's* procession is made up in the following manner ; − First comes the prince himself in his norimon, followed by his horse and retainers, armed with swords, spears, and matchlocks ; then follow a number of coolies, each carrying two lacquered boxes slung across his shouldor on a bamboo pole. After these again there is another norimon, with an official of some kind ; then more coolies with boxes, more retainers, and so on. The number of the followers is often very large, and depends upon and is regulated by the wealth and rank of the Daimio.

神奈川宿を通過するもののうちで、フォーチュンの目を最も引いたのは、大名行列であった。しかし、また、街道を通る駄馬、駕籠、歩行の者、托鉢僧、盲人、乞食、花屋なども、フォーチュンが、ヨーロッパや中国でこれまで目にしたものとは様子が違っていた。

駄馬

大名の行列が通り過ぎると、東海道の日々の人馬の往来はまた平常に戻った。この辺の街道では車は使用されていない。荷物は総て馬の背で運搬される。だから終日おびただしい駄馬が通る。どの馬も驚くべき大型の箱や荷物を積んでいる。つばの広い麦わらの笠をかぶった馬方が、馬上から馬の口綱を引いて指揮している。町を通る時、駄馬はたいてい馬方に引かれている。大きな荷物を積んでいる上に、妻子などの小家族が荷物の中に同居していることも珍しくない。

When the retinue of the great man has passed by, the stream of every-day life flows on along the great Tokaido as before. No carts are used on this part of the road. Everything ie carried on pack-horses, and these are passing along the road in great numbers alI day long. Each horse is loaded with a pile of boxes and packages − a formidable size oftentimes, surmounted by a man in a large broad-brimmed straw

hat, who, from his exalted position, is guiding the movements of his horse. Generally, however, when passing through towns, the horses are led by the drivers. In addition to the huge pile of packages, it is not unusual for a little family, consisting of the mother and children, to be housed amongst them.

歩行の者

東海道を通る行列、駄馬、駕籠のほかに、徒歩で行く者にも注目せずにいられない。つばの広い風変わりな麦わらの笠をかぶっている者や、頭に手拭で鉢まきをしている者もいる。笠を背中に背負って、雨の時や強烈な太陽光線が堪えがたい時だけかぶる者、また何もかぶっていない者や、前髪を剃って頭のてっぺんに、小豚のしっぽのような髷を結びつけた者もいる。

Besides the Processions, pack-horses, and palanquins, the pedestrians on the Tokaido demand our attention. Some are crowned with queer-looking broad-brimmed straw hats ; others have napkins tied round their heads, and their hats slung behind their backs, only to be used when it rains or when the sun's rays are disagreeably powerful ; while others again have the head bare and shaven in front, with the little pigtail brought forward and tied down upon the crown.

托鉢僧

托鉢僧にも出会う。彼らは長い杖の上に付けた鈴を鳴らしながら各戸口に立って、祈祷を唱えては、彼らの生計の足しや寺の維持のために施しを受ける。だが、彼らは最も自立教派的な僧侶で、むしろ、受ける者であるよりも、仏の恵みを人々に授けていると考えているようだ。大体同じような僧が毎日のように回って来るが、施しを断られるのは、まれであった。その祈祷は、私にはいつも同じように、「南無、南無、南無 ── 」と、時には低く時には高く、唱えているように思われた。日本の貨幣の小銭が、僧の鉢の中に技（ママ）げ入れられると、彼はその施しの返礼に、もう一度鈴を鳴らしながら経文を唱えて、隣家の方へ立ち去った。

Mendicant priests are met with, chanting prayers at every door, jingling some rings on the top of a tall staff, and begging for alms for the support of themselves and their temples. These are most independent-looking fellows, and seem to think themselves conferring a favour rather than receiving one. I observed that they were rarely refused alms by the people, although the same priests came round almost daily. To me the prayer seemed to be always the same − namely, *nam-nam-nam* ; sometimes sung in a low key, and sometimes in a high one. When the little copper cash − the coin of the country − was thrown into the tray of the priest, he gave one more prayer, apparently for the charity he had received; jingled his rings, and then went on to the next door.

盲人と乞食

盲人もまたよく見掛ける。彼らは奇妙な音のする笛を吹きながら、盲人が近づいて行くのを知らせる。多くの盲人達は、目の見える幸運な人達を按摩して、生計の資を得ている。時々、汚いむしろを肩に掛けた屈強な乞食の一群が、この街道の人波の中を浮浪している。

Blind men are also common, who give notice of their approach by making a peculiar sound upon a reed. These men generally get their living by shampooing their more fortunate brethren who can see. Every now and then a group of sturdy beggars, each having an old straw mat thrown across his shoulders, come into the stream which flows along this great highway.

花屋

そうかと思うと、きれいな花籠を抱えた花屋が、女の人の髪飾りに買わせようと、勧めるのに骨を折っている。また、シキミだの別の常緑樹を売っているが、これは死者の墓に飾られる。

Then there is the flower-dealer, with his basket of pretty flowers, endeavouring to entice the ladies to purchase them for the decoration of their hair ; or with his branches of "*skimmi*" *(Illicium anisatum)*, and other evergreens, which are largely used to ornament the tombs of the dead.

条約締結国は、神奈川に港を作り、そこに外国人居留地を確保しようとした。それは、神奈川が首都江戸に近いのみならず日本の本街道の主要な宿駅であり、この街道を繁く通行する各地の日本人によって、本国の製品が、各地に運ばれて速やかに認知され評価されると考えたからであった。これに対して、江戸幕府は、不特定多数の日本人が、外国人に安易に接して、騒動や事件を起こすことを恐れて、東海道筋から離れた横浜に港町を建設した。フォーチュンは、東海道神奈川宿を通行する人々の様子を記したあと、その昼夜を問わない人通りの多さを述べて筆を結んでいる。

類のないパノラマ

こうして江戸に通じるこの街道は、終日、夜にかけても絶え間ない人々の生命の流れで充満している。これは異常なパノラマで、たしかにこの国の偉観に違いない。

All day long, and during a great part of the night too, this continual living stream flows to and from the great capital of Japan along the imperial highway. It forms a panorama of no common kind, and is certainly one of the great sights of the empire.

Ⅲ　神奈川から川崎へ

フォーチュンは、二度の来日中、ともに神奈川の滞在地から、江戸へ出向いている。ま

ず、1860 年 11 月 13 日に、イギリス特派全権公使オールコックの招きを受けて、神奈川で住居としていた慶運寺からイギリス公使館の置かれていた江戸高輪東禅寺に向けて出立している。そして、二度目は、1861 年 5 月 20 日、初代日本駐在アメリカ公使タウンゼンド・ハリス（Townsend Harris 1804-1878）の招待で、神奈川から麻布の善福寺にあったアメリカ公使館へ出かけた。このうち神奈川宿から川崎宿までの東海道の様子は、一度目の江戸出向に詳述される。

陰暦万延元年 10 月 1 日、雨模様の中、つばの広い丸い笠を被り合羽を着て二本差しで馬に乗った奇妙な姿の幕府役人に護衛されて、フォーチュンは、東海道を下っていった。フォーチュンは、左側に雑木の山、右側に江戸湾を眺めながら進み、行き交う人々から礼儀正しい挨拶を受ける。生麦村の手前まで、東海道は、海岸沿いを通っていた。しかし、風光明媚な風景とはうらはらに道端に夥しく座っている乞食たちから物乞いされてフォーチュンは、おおいに閉口する。

沿道風景

一行は、前に述べた日本の国道である東海道を江戸湾の海岸沿いに東へ進行した。道の両側に小店、茶屋、休憩所、菜園などが並んでいる。時々見晴らしのよい並木道を通った。並木には概して、スギ、クロマツ、エノキ (Celtis Orientalis)、ケヤキ (Ulmus Keaki) などが植えられていた。木の間越しにチラと見える景色や、その後ろの菜園の向うも非常に眺めがよかった。左側の眺望は、近くのこんもりした雑木山でさえぎられた。右手の前方には波静かな江戸湾が広がり、あちらこちらに漁船の白帆が点在している。通りすがりの人達は大へん丁寧で礼儀正しく、「オハヨウ！」とか「コンニチハ！」というのが日常の挨拶であった。

Our road − the Tokaido, or Imperial highway already mentioned − led us to the eastward, along the shores of the Bay of Yedo. Small shops, tea-houses, sheds for the accommodation of travellers, and gardens, lined each side of the way. Now and then we came to an open space with trees planted in the form of an avenue. These were chiefly of such species as *Cryptomeria japonica, Pinus Massoniana*, *Celtis Orientalis*, and *Ulnus keaki*. The glimpses which were obtained, from time to time, through these trees and across the gardens behind them, were very beautiful. On the left, at a little distance, the view was bounded by some low hills of irregular form, crowned with trees and brushwood ; while on the right the smooth waters of the Bay of Yedo were spread out before us, here and there studded with the white sails of fishing-boats. The people along the road were perfectly civil and respectful. “Anata Ohio,” or “Good morning, sir,” was a common salutation.

乞食

ケンペルの報告によると、彼が滞日〔元禄 3 年 (1690) − 5 年〕した頃は、「多数の乞食が日本中到る所の道路、特に往来のはげしい東海道に群らがっていた」由である。私の記憶が正しければ、イギリス使節ロード・エルジン一行が川崎を通った時は、一人の

乞食にも出会わなかったそうだから、このケンペル説を疑ったかもしれない。しかし、この時は多分当局の指図で、 乞食は他へ放逐させられていた。私に言わせれば、ケンペルの時と同じように、実際日本には乞食がおびただしくいて、うるさくせびるのである。私がそこを通った時にも、道端に多勢の乞食がすわっていた。彼らは不具者やびっこや盲人で、私が通ると地面にひれ伏して物乞いをした。

Kæmpfer informs us that in his time "multitudes of beggars crowded the roads in all Parts of the empire, but particularly on tho so much frequented Tokaido." Some of the members of Lord Elgin's embassy, if I remember right, seem to doubt the truth of this, as they did not meet with any on the occasion of their visit to Kawasaky ; but on this occasion beggars were probably kept out of the way by the authorities. Truth compels me to state that at the present day, as in the days of Kæmpfer, the beggars in Japan are numerous and importunate. As I rode along the road, there were many who "sat by the wayside begging." These were "the maimed, the halt, the lame, and the blind," who, as I passed by, prostrated themselves on the ground and asked for alms.

エルギン（James Bruce, 8th Earl of Elgin and 12*th* Earl of Kincardine, 1811-63) はイギリスの外交官で、1857 年、アロー号事件処理のために中国に特派され、翌 1858 年、天津条約を締結した後、江戸に来航して、同年 8 月 26 日（陰暦安政 5 年 7 月 18 日）、日英通商条約を締結した。このエルギンの私設秘書として随行したのが、ローレンス・オリファント（Lawrence Oliphant, 1829-88）で、使節一行の中国・日本における行動・交渉過程・見聞などを記録した『1857, '58, '59 年におけるシナ及び日本へのエルギン伯使節団の物語』（*Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59.* William Blackwood, Edinburgh & London, MDCCCLIX, 2 vols, 1859）を帰国後に出版した。オリファントが、江戸に滞在したのは、1858 年 8 月 12 日から 8 月 26 日の約二週間。エルギン一行は、8 月 24 日、芝の西応寺から東海道に出て、高輪、品川、大井、大森、蒲田を抜け、多摩川を渡って川崎の平間寺（通称川崎大師）に向かった[6)]。僅かな距離ではあったが、イギリス人にとって始めての東海道遡上であった。

そして、その約 1 年 5 ヶ月後、神奈川から生麦、鶴見と東海道を下って来たフォーチュンは、川崎から先、かつてのエルギン一行とは逆の道筋を辿って高輪に行くことになる。フォーチュンは、川崎宿に向かう途中、一軒の茶屋で休息を取った。

茶屋

旅行者が食事や休憩をする茶店は、街道の目につく所に数百ヤードおきにあった。これらの店は商店のように前が明け放しで、畳を敷いた床上に、客がすわって休んでいた。食器類はよく見える場所に、徳利、湯沸し、茶わん、盆などの多くの必要品が並べてあった。ある茶店に近づくと、きれいな娘達が、上等の茶をいれた茶わんをいくつもお盆にのせて、道の真中まで出迎えた。そして旅の疲れを回復するために、食事をしきりに勧めるのだった。そこで神奈川から約六マイルの所で、並より幾分大きい、一軒の茶店に

はいった。この茶店の亭主は、旅行者や役人の馬に水をやることを、自分の務めにしているらしかった。そのために一人の男が馬にやる水桶を用意してくれた。そうした手数に対する心付として、小銭をおいて行くのが習慣になっている。

Tea-houses for the refreshment and accommodation of travellers formed the most remarkable feature on the road, and were met with at every few hundred yards. These buildings, like the shops, are perfectly open in front, and have the floors slightly raised and covered with mats, on which customers squatted and took refreshment. The cooking apparatus was always fully exposed to view, with its necessary appendages, such as pots, kattles, teacups, and basins. On approaching one of these tea-houses some pretty young ladies met us in the middle of the road with a tray on which were placed sundry cups of tea of very good quality. This they begged us to partake of to refresh us and help us on our journey. When about six miles from Kanagawa we arrived at one of these tea-houses which was rather larger than usual. Here it seemed to be the duty or privilege of the landlord to provide water for the horses of travellers and Government officials, and consequently we found a man ready with a pail of water for our horses. It ie customary to leave a small present in the coin of the country in return for these civilities.

生麦村は、『江戸名所図会』に「生麦は河崎と神奈川の間宿にて立場なり」とあるように両宿場のちょうど中間にあり、休憩施設があって馬や駕籠の交代を行なう立場となっていた。そして、同書に「此地しがらぎといへる水茶屋は享保年間鄽（みせ）を開きしより梅干を鬻（ひさ）ぎ梅漬の生姜を商ふ。往来の人ここに休（いこ）はざるものなく今時の繁昌ななめならず」と記されるように梅干しと梅漬けの生姜が名物であった「しがらぎ」という茶屋が有名であった。

また、その先の鶴見橋のたもとには、『江戸名所図会』が「橋より此方に米饅頭を賣家多く此地の名産とす。鶴屋などいへるもの尤旧く慶長の頃より相續するといへり」と記すように、鶴屋をはじめとして皮を米粉で作った米饅頭を売る茶屋が多くあった。

フォーチュンは、神奈川を出発しておよそ9kmの地点で休憩をとりさらに3kmほど進んで川崎宿に入った。

川崎宿

神奈川から江戸までの行路は、二〇〇ヤードか三〇〇ヤードおきくらいに、両側にずっと家が並んでいた。所々でひとかたまりの家並が人口の稠密でかなり大きな村や町に膨張している。川崎という町がその一例で、神奈川の東方約七、八マイルの所にある。そこは賑やかな市場町らしく、本通りには店や茶屋が建ち並び、往き来する通行人や、買ったり売ったり、またはぶらついている人びとで雑踏していた。この国道を首都へ行き返りする旅行者は非常に多かった。時折り、役人や高貴の人達の乗物の後につづく、足軽や武士の長い行列に出会った。足軽は荷物の運搬役であったが、随行する家来共は多分、かれらの主人の護衛と、大層な見えのためでもあった。

With the exception of a few hundred yards here and there, the whole road from Kanagawa to Yedo is lined on each aide with houses. Now and then the single row expands into a village or town of considerable size, teeming with a dense population. One of these, named Kawasaky, stands about seven or eight miles east from Kanagawa. It seemed a busy market-town. The road which formed the main street was lined with shops and tea-bouees, and crowded with people passing to and fro, buying and selling, or lolling about looking on. Travellers too were numerous, who were either going to the capital or returning from it on the great highway. Now and then we met a long train of coolies and armed men in the wake of a norimon containing an official or person of rank. The coolies were carrying the luggage, and the retainers were in attendance probably as much for show as for the protection of their master.

川崎宿は、すでに宿駅となっていた品川・神奈川両宿の幕府への懇請によって元和 9 年（1623）に宿場として成立したとされる。品川神奈川間の距離は五里あり、両宿の伝馬負担は過重なものであった。川崎宿は、五十三次のうちでは、駿河の吉原宿に次いで 2 番目に新しい宿場であった。文久 3 年（1863）9 月の「川崎宿書上張」（森家文書、川崎市市民ミュージアム蔵）によれば、宿場の往還を構成する四町の内訳は、江戸方面から久根崎町 65 間（約 117㍍）、新宿町 310 間（約 558㍍）、砂子町 263 間（約 473㍍）、小土呂町 194 間（約 349㍍）であった。そしてこの間の東海道の道幅は、平均 3 間（約 6.3㍍）から 4 間（約 7.2㍍）の広さがあった。同記録によれば、川崎宿の総家数は 641 軒、他の宿場と同じように東海道の両側に沿って 1.5㎞にわたり細長い状態で家並みが密集していた[7)]。

また、天保 14 年 (1843) の「東海道宿村大概帳」（『近世交通史料』4 所収）には、京寄りの上本陣が砂子町に、江戸寄りの下本陣が新宿町にあり、宿全体で 72 軒の旅籠屋（内大 9 軒、中 29 軒、小 34 軒）があったことが記されている[8)]。

川崎宿は、東海道をくだって江戸に向かう旅人にとっては、六郷の渡しをひかえた最後の宿泊地であった。また、京方面へののぼりの旅人には、昼食や休憩をとる位置にあった。

フォーチュンは、街道沿いにあるこの地で最もよく知られた一軒の茶屋の亭主に呼び止められ、女中たちからも休憩をとるようにと勧誘される。

万年屋

川崎のはずれに到達したとき、われわれは『万代屋』という土地一番の茶屋の亭主に、いんぎんに呼びとめられた。「ぜひお上り下さい」と、無理強いするうえ、三、四人の女中までが、勧誘の応援につとめるのだった。しかし、今度はこの客引をきっぱり断った。というのは休憩は不必要だったし、度重なると、たしかに費用がかさむからであった。

When we arrived at the further end of Kawasaky we were again politely stopped by mine host of the “Hotel of Ten Thousand Centuries,” a tea-house of the first class, who insisted on our entering his establishment for refreshment to ourselves and our good steeds. His invitation was seconded by three or four Japanese beauties, but we

were ungallant enough this time to decline the hospitality, as it was unnecessary, and as these frequent stoppages were rather expensive.

川崎宿の入口すなわち棒鼻とよばれる所には、立場茶屋として会津屋、新田屋、藤屋などがあったが、もっとも有名であったのが万年屋であった。文久3年（1863）2月の「将軍上洛に付宿並書上」（森家文書、川崎市市民ミュージアム蔵）によれば、江戸口から二軒目に店を構え、ともに二階屋の表屋敷と別屋敷の二棟があった。表屋敷一階は間口11間半、奥行12間、畳数91、坪数123、二階は38畳20坪。別屋敷一階は間口5間半、畳数27畳半、坪数24、二階は36畳24坪であった[9)]。『江戸名所図会』には、「河崎万年屋／奈良茶飯」と題して見開きの絵として描かれている。名物の奈良茶飯とは、少量の米に炒った大豆や小豆、焼いた栗などに季節の野菜を加え、塩や醤油で味付けした煎茶やほうじ茶で炊き込んだものとされている。宝暦・明和年間（1751～1771）は十三文均一の一膳飯屋であったが、文化・文政の頃（1804～1829）には、茶飯一人前四十八文で大いに繁昌したという[10)]。この万年屋は、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』（初編は享和2年・1802・刊）に取り上げられて一層有名となり、江戸時代後期には大名が昼食に立ち寄るほどの人気を博したと言う。

当時の万年屋のことは、ハリスの日記1857年11月28日（陰暦安政4年10月12日）の項にはやく見え[11)]、また、フォーチュンより遅れて1863年4月にスイス使節団首席全権として来日したアンベール（Aimé Humbert, 1819-1900）の『幕末日本図絵』（*Le Japon Illustré*, Paris,1870）には挿絵入りで紹介されている[12)]。

川崎宿に入る前に休憩を取ったフォーチュンは、この時、外国人の間でも知られていたとおぼしき万年屋には立ち寄らなかった。しかし、11月28日、江戸からの帰路、鈴ヶ森の刑場を見たあと、川崎大師詣でのために万年屋に馬を預け、参詣後、万年屋で接待を受けた。川崎宿通過後、往き道で入った大森の梅屋敷同様、フォーチュンは、茶屋の若い娘たちの接待を受けて悦に入った。なお、フォーチュンは、万年屋を‘Hotel of Ten Thousand Centuries’としているが、訳者はこれを「万代屋」と訳している。

万年屋の接待

万代屋旅館に戻ると、数人の女中が急いで迎えに出て来て、紋切形の「お早うございます」と挨拶した。これは「グッド・モーニング」や「ハウ・ドウ・ユー・ドウ」の日本語である。旅館のサービス過剰の主な目的は、旅人のふところから、一分(江戸時代の長方形の銀貨幣で、一両の四分の一。英貨の約一八ペンスに当たる)を幾つも当てにしていることを知っている。しかし、やはり親切にもてなされれば嬉しいものだから、チヤホヤされる動機について、あまり厳密に調べるほどのことはない。この場合、埃っぽいひどい道を、強い日光に照りつけられて長時間歩いたので、かわいらしい小女に案内されて部屋に招じられ、旅の疲れを回復して、食事をしたのは喜ばしいことであった。これと同じ場面は、すでに描写したように梅屋敷で演じられていた。私の前に置かれた低い正方形の卓の上には、いろいろな甘い菓子や干しくだものやお茶などが並べてあった。茶屋の若い女たちが、私の前や両側にすわって、お茶をついだり、菓子やくだものを進めた。その間に他の女は、殻をむいて塩をつけたゆで卵を、私の口に運んでくれる世話を焼いた。確かに、こうした至れり尽くせりの客あしらいは、ひどく疲れた旅人を

回復させ、満足させて旅に送り出すのに十分であった。しかし、ついに惜しい快を分つ時が来たので、余儀なく万代屋の主人や陽気な女中たちに別れを告げて、神奈川への道を急いだ。

When we got back to the inn of "Ten Thousand Centuries" a number of the waiting-maids of the place came running out to welcome us with the usual "Ohio" or "Good morning ; how do you do ? " of the Japanese. I know that the main object of all this excessive civility is to bring custom to the establishment, and sundry *itzeebus* out of the pockets of the traveller ; but after all, there ie much gratification in a kind reception, and it is not worth while to look too closely into the motives of those who give it. In the present instance we had had a long walk over a dry hard road, the sun had been hot, and we were glad to accept the invitation given to us by the pretty damsels to enter the inn and refresh ourselves after our journey. The same scene was now exhibited as I have already described at the "Mansion of Plum-trees." A low square table was placed before me, covered with different kinds of sweet cakes, dried fruits, and cups of tea. The young girls of the tea-house, kneeling in front and on each side of me, poured out my tea, and begged me to eat of the cakes and fruits, while one of them busied herself in taking the shells off some hard-boiled eggs, dipping them in salt, and putting them to my mouth. Surely all this was enough to satisfy and refresh the most weary traveller, and to send him on his way rejoicing. But the best of friends must part at last, so I was obliged to bid adieu to mine host and his fair waiting-maids of the "Ten Thousand Centuries," and pursue my way to Kanagawa.

Ⅳ　六郷の渡し

川崎宿の江戸口にあった万年屋を過ぎると、すぐに幕府御普請の渡船御賄場所となる。この通称舟場町には、会所、貫目改所、渡船高札場、水主小屋などがあった。そして、見附と呼ばれる切石を積んだ土居を越えると六郷渡船上り口に至る。

江戸時代、多摩川の上流を入間川と呼び、下流を六郷川と呼び習わしていた。この六郷川と東海道が交差する場所には、幕府によって慶長5年(1600)7月に六郷大橋が懸架される。『東海道名所図会』（秋里籬島、寛政9年・1797・刊）に、「武蔵国三大大橋の其ひとつ也。長サ百九間ありといふ」と記されるように、文禄3年（1594）創架の千住大橋、万治2年（1659）あるいは寛文元年（1661）創架の両国橋とともに江戸三大橋と呼ばれた。六郷大橋は慶長18年（1613）に改架、さらに寛永20年（1643）にも改架される。六郷大橋は、河口近くの砂地に立脚し、堤防の整備も遅れていたことから洪水のたびに流失の危険にさらされた。大橋は、その後、破損流失と再架を繰り返すが、貞享5年（1688）7月21日の流出を機に渡船通行へと移行する。そして、流路の浚渫、護岸工事、波止場の建設など渡船場諸施設の本格的な整備が行われたのは、宝永6年（1709）であった[13)]。この船渡しは、明治7年（1874）1月に、橋が架けられるまで続いた。

幕末期、東海道を江戸方向に向かう一般外国人にとって、橋のない六郷川で遮られたこの地点は、自由に行動することができる遊歩区域の境界であった。フォーチュンは、このこと

を次のように記している。

遊歩区域

六郷川が東海道を横切っている地点は、条約によって、日本と締結した各国公使館に属していない外人は、これより先は江戸方面へ進むことを許されていない。といっても幕府の認可をもつ各国公使には、特別許可が与えられている。すなわち江戸方面を除いては、十里ー約二十五マイルの範囲ならば、どこへでも旅行することを許されている。だから、そこは気晴らしや博物学、地質学その他の科学の研究のどれにも役に立つ、広大な地域であることが判るだろう。

At this place the river Loga intersects the main road. According to treaty, foreigners are not allowed to pass further than this point in the direction of the capital, unless they belong to the Legations of those nations who have treaties with Japan. Special permissions are however granted by the different ministers, with the sanction of the Japanese Government. In all other directions from Kanagnwa, except this one, foreigners are allowed to travel to the distance of ten *ri*, or about twenty-five miles. It will be seen, therefore, that there is a large tract of country available either for recreation or for researches in natural history, geology, and other sciences.

江戸幕府は、開国にともなって、神奈川、函館、兵庫、長崎、新潟を開港することを条約にもりこんだ。しかし、外国人が自由に行動できる範囲は、開港地からの距離を制定することによって制限されていた。幕府が、1858 年 7 月 29 日（安政 5 年 6 月 19 日）に、アメリカと結んだ通商条約の第 7 条は、次のようであり[14]、これは、その後幕府が締結した各国との条約に継承されていく。

遊歩規定

日本開港の場所に於て亜米利加人遊歩の規程左の如し

神奈川　六郷川筋を限りとして其他は各方へ凡そ十里

函館　各方へ凡十里

兵庫　京都を距る事十里の地へは亜米利加人立入さる筈に付き其方角を除き各方へ十里且兵庫に来る船々の乗組員は猪名川より海湾迄の川筋を超ゆへからす

都て里数は各港の奉行所又は御用所より陸路の程度なり（一里は亜米利加の四千二百七十五ヤルド日本の凡三十三町四十八間一尺二寸五分に當る）

長崎　其周囲にある御料所を限りとす

新潟は治定の上境界を定むへし

In the opened harbors of Japan, Americans shall be free to go where they please, within the following limits:

At Kanagawa, the river Lokugo (which empties into the bay of Yedo, between

Kawasaki and Sinagawa) and (10) ten ri in any other direction.
At Hakodate, (10) ten ri in any other direction.
At Hiogo, (10) ten ri in any other direction, that of Kioto excepted, which city shall not be approached nearer than (10) ten ri. The crews of vessels resorting to Hiogo shall not cross the river Enagawa, which empties into the bay between Hiogo and Osaca.
The distances shall be measured inland from the goyoso or town-hall of each of the foregoing harbors, the ri being equal to (4275) four thousand two hundred and seventy-five yards, American measure.
At Nagasaki, Americans may go into any part of the imperial domain in its vicinity.
The boundaries of Neegata, or the place, that may be substituted for it, shall be settled by the American diplomatic agent and the government of Japan.

この条約によって、関東圏の場合、一般の外国人の自由に行動できる範囲は、神奈川奉行所を中心とした十里（約 40㎞）四方と決められ、さらに、江戸方向に関しては、東海道を下っても六郷川を越えることはできなかった。また、幕府は、この遊歩区域設定によって浪士による外国人殺傷事件が頻発したため、万延元年（1860）2 月末から閏 3 月にかけて、関東取締出役の主導のもとに外国人の遊歩する多摩川や鶴見川べりに多数の見張番屋や木戸を設置した[15]。さらに、文久 2 年（1861）の生麦事件後、川崎宿内の小土呂、八丁畷、市場に、外国人監視のための関門が設置されて、幕府役人二人、当宿の者二人、使丁一人の五人が常時詰めていた[16]。

しかし、これらの対策にもかかわらず六郷川を越えて江戸入りする一般外国人が少なからずいた。フォーチュンが二度目の来日をしたとき、イギリス公使のオールコックは香港で裁判中のため不在であった。そこでフォーチュンは、イギリス公使館の許可を得ずに、アメリカ公使ハリスの厚遇によって江戸入りをした。このことをフォーチュンは、次のように記している。

通行許可

日本が外国の権力によって締結した条約には、外国人は官吏でない限り、東海道と六郷川が交差している地点から、江戸の方へ行くことはできない、ということが規定されている。けれども江戸に駐在している各国公使達は、幕府の承認を得れば、江戸へ彼らの友人を誘うのは常例になっていた。イギリスの婦人でさえ数回も江戸に来て、この大都会を見物して非常に喜んで帰った。だから、私が友好国の代表の厚遇を受けて江戸に来たからといって、重い罪を犯したとは考えられない。とくに私は周知のように、危険な政治的の目的を持っていなかったが、私はイギリス人として、取るに足らぬ権威を笠に着る公使館員に、膝を折って挨拶せずに、江戸にやって来たことを認めなければならない。

It is stipulated in the treaties which the Japanese have made with foreign powers, that no foreigner, unless he be an official, can proceed nearer to Yedo than that point

where the river Loga intersects the Imperial highway. Bnt all the ministers who reside there had been in the habit of inviting their friends to Yedo, apparently with the knowledge and sanction of the Japanese Government. Even English ladies had been there on several occasions, and had returned highly delighted with their view of the great city. I had, therefore, no idea that I was committing a heinous offence in accepting the hospitality of the representative of a friendly Power, particularly as it was well known I had no dangerous political objects in view. But I was unfortnately a British subject, and I had come to Yedo (unwittingly, I must confess) without first bowing the knee to him who was dressed in a little brief authority

フォーチュンは、一度目は、自国イギリス公使館の許可によって、二度目は、アメリカ公使館の容認によって六郷川を越えた。二度の江戸行きともに公使の招待ということで幕府役人の厳重な護衛がついた。フォーチュンは、六郷の船渡しの様子を次のように記している。

六郷の渡し

馬から下りて、役人と私は底の平たい舟で、馬とは別の舟で六郷川を渡った。この川は幅が百フィートくらいの小さな流れで、非常に浅い。われわれの舟は長い竹竿であやつられ、向う岸へ渡った。この川を越えてから、馬で江戸に向って進行した。

Dismounting from our horses, we crossed the Loga in flat-bottomed boats, the horses being put into one, and the yakoneens and myself going in another. This river is but a small stream of one hundred feet in width, and quite shallow. Our boats were guided and propelled across by long bamboo poles. When we had crossed the river we rode onwards in the direction of the capital.

六郷川の川幅は百十二間（約 202 m）。渡船賃は、人ひとり十文、本馬口付共一疋で十五文、軽尻は十二文であった。ここでいう人ひとりとは、持荷量五貫目（約 18.7kg）以内の賃銭、本馬とは、荷物一駄四十貫目（約 149kg）を積んだ馬、軽尻とは荷物がない馬に人ひとりの運賃のことである。渡船賃の徴収や貫目の改めは、会所で行った。ただし、武士階級は無賃であった[17)]。

寛政４年（1792）の記録によれば、渡船の総数は 14 艘（馬船８、歩行船６）で、八幡塚、川崎宿の両岸にそれぞれ４艘（馬船２、歩行船２）が常に配置されていた。明六ツ時から暮六ツ時まではこの８艘が就航し、夜分は半分の４艘が運航した。渡船従事者は、会所詰役４人、水主頭４人、水主 24 人であった。船の規模は、馬船が長さ六間半幅一間二尺で、馬四疋が乗り、水主二人がつく。歩行船は長さ六間二尺幅一尺五寸、三十人乗りで水主一人がついた[18)]。

フォーチュンと役人は、歩行船に乗り、乗ってきた馬は馬船に乗せられて、六郷川を越えた。船はこれまで見たことのない船底の平たい平船で船頭がこれを竹竿で操った。

向こう岸に降り立ったフォーチュンは、２マイルほど馬を走らせて大森の梅屋敷で休憩を取り、品川沖に碇泊していたアメリカのフリーゲート艦ナイアガラ号や品川台場を左手に臨み、まもなく高輪の英国公使館に到着した。フォーチュンは、江戸滞在中、愛宕山から江戸

市中を眺望したのをはじめとして江戸城を外堀から眺め、大名屋敷街を見物し、また、団子坂、王子、染井など江戸近郊を散策して植物を収集し、さらに浅草寺に参詣して隅田川界隈を巡った。

一般外国人として二度の江戸行きを果たしたフォーチュンは、その印象をヨーロッパの都市との比較を通して次のように述べている。

緑の大都市

私は本章と前章で、日本の首都と近郊の記述に努めたが、今は若干の概括的観察をまとめて、報告を終わろうと思う。江戸は広大な都市で、多くの点ですぐれているとはいえ、ロンドン、パリ、その他のヨーロッパ諸国の首都とは、道路、建築様式、商店の構え、商品の価値など、いずれにおいても比較にならない。江戸にはウーリッチやグリーニチもなく、聖パウロ僧院やウエストミンスター寺院もないし、エリゼー宮やヴェルサイユもない。またパリのブルーバードやロンドンのリーゼント街のように見るべきものはない。実際、日本人の習慣と嗜好は、ヨーロッパ諸国の人びとと甚だしく異なっているので、比較してもほとんど共通する所がない。にもかかわらず、江戸は不思議な所で、常に外来人の目を引きつける特有のものを持っている、江戸は東洋における大都市で、城は深い堀、緑の堤防、諸侯の邸宅、広い街路などに囲まれている。美しい湾はいつもある程度の興味で眺められる。城に近い丘から展望した風景は、ヨーロッパや諸外国のどの都市と比較しても、優るとも決して劣りはしないだろう。それらの谷間や樹木の茂る丘、亭々とした木々で縁取られた静かな道や常緑樹の生垣などの美しさは、世界のどこの都市も及ばないであろう。

In this and in former chapters I have endeavoured to give a description of the Japanese capital and suburbs, and I shall now end my account with a few general observations. Although Yedo is a large city, and remarkable in many ways, it cannot be compared with London, Paris, or any of the chief towns in Europe, either in the architecture of its buildings, the magnificence of its shops, or in the value of its merchandize. It has no Woolwich or Greenwich —— no St. Paul's or Westminster Abbey —— no Champs Elysées or Versailles ; it has nothing to show like the Boulevards in Paris or like Regent Street in London. Indeed the habits and wants of the people are so different from those of European nations, that we have little in common for a comparison. But, neverthelees, Yedo is a wonderful place, and will always possess attractions peculiarly its own in the eyes of a foreign visitor. It is of great size for an Oriental city ; its palace surrounded by deep moats and grassy banks, the official quarter, the residences of the native princes, its wide streets, and beautiful bay will always be looked upon with a certain degree of interest. Then, the views which are obtained from the hills in its neighbourhood are such as may well challenge comparison with those of any other town in Europe or elsewhere. Its suburbs, too, as I have already shown, are remarkable in many ways. Those beautiful valleys, wooded hills, and quiet lanes fringed with noble trees and evergreen hedges, would be difficult

to match in any other part of the world.

Ⅴ　浮世絵に描かれた風物

浮世絵東海道五十三次シリーズのうち川崎宿には、おおく六郷の渡しが描かれる。川崎宿の風物の第一は、六郷川の渡し船であった。船に乗る男女は、季節によって編み笠を被り日傘をさしたりしている。「人物東海道」と称される一枚では、川崎大師に参詣するとおぼしき美人だけの乗る船一艘のみが描かれる。また、一枚は、武士が歩行船に乗りきらびやかな馬具を着けた馬が馬船に載せられているという船渡しを描く。これは、14代将軍家茂の文久3年（1863）の上洛の様子を描いたシリーズの一枚である。渡し船のほとんどは竿によって繰られているが、なかには櫓を漕ぐ船がある。おそらく水量の増減によって使い分けられたのであろう。渡し船のほかには川を下る帆掛け船や筏流しが描かれたりする。幕末期、奥多摩の山々から切り出した杉・檜などの木材は筏に組まれ、筏乗りが棹さして河口に近い六郷や羽田の筏宿まで川下げし、そこからは船積みか、引筏で本所・深川などの材木問屋へと運ばれていた。また、多摩川で採掘された砂利や年貢米などは、帆船によって羽田まで運ばれ、そこで海船に積み替えられて神田や浅草へ送られた[19]。

川岸に視点を移せば、船着き場で渡し船を待つ人、会所で渡船賃を払う人などが描かれる。会所には幟が立ち、川崎宿入口の左側には石の道標が立つ。この幟には「御用」の文字が書かれ、道標には「大師河原／従是弘法大師左之道」と記されていた[20]。

江戸時代、川崎は武蔵国のうちであった。遠景が描かれるとき、そこには江戸庶民の信仰の対象であった富士山を見ることができる。

【注】

1）ロバート・フォーチュンについては、以下の書を参照。
①『プラントハンター』（白幡洋三郎、講談社選書メチエ、1994）
②『幕末日本探訪記―江戸と北京』（三宅馨訳、白幡洋三郎解説、講談社学術文庫、1997）
③『プラントハンター東洋を駆ける』（アリス・M・コーツ著、遠山茂樹訳、八坂書房、2007）。
原書は、*The Quest for Plants*：a History of the Horticultural Explorers, London, 1969 。

2）ホジソンの日本植物目録は、‘*A Residence at Nagasaki and Hakodate in 1859–60*, London, 1861’に所載。

3）オールコックの記録した東海道については、「本学蔵東海道関係浮世絵（三）―日本橋から品川宿―」（『東京成徳短期大学紀要』2011年3月）において考察。

4）訳文引用は『江戸と北京』（三宅馨訳、廣川書店、1969）による。また、英文の引用は、1863年 London : John Murry, Albemarle Street 発行の初版本による。

5）ドイツ語版は、英訳本に遅れて、1777年から1779年にかけて、クリスチャン・ヴィルヘルム・ドーム（christian Wilhelm Dohm 1751–1820）の編纂で *Geschichte und Beschreibung von Japan* ; Aus den Originalhandschriften des Verfassers と題して刊行された。

ケンペルの記した神奈川の様子は次のとおり。なお訳文はドーム版による『江戸参府旅行日記』（斎藤信訳、東洋文庫、1977年）、英文は、1727年初版の複製 Yushodo Booksellers Ltd. ,Tokyo, 1977 および Beatrice M. Bodart-Bailey によるケンペル自筆稿本の新訳 Kaempfer's Japan, University of Hawai'i Press, 1999 による。

このあたりで日が暮れ、海岸沿いに一里進んで、九時に神奈川に着き、ここで泊った。わ

れわれは昼食後五里の道を旅したのである。およそ六〇〇の家々が立並ぶこの土地の町筋は、半里も長く続いていた。この町は神奈川という名が付いているが、どこにも川はない。町はずれの山や長く続く丘の麓にたくさんの穴が作られていて、住民は貯えた水をこの中から飲料として汲むのである。この水は大へんすき通ってはいるが、やや塩辛かった。近くにある入江では、潮がいちばん引いた時には、泥ぶかい沼のような海底が見えた。

The night overtook us here, but we continu'd our journey one mile further by moonshine, travelling along the coasts, as far as the small town or village of *Canagawa*, where we arriv'd at nine in the evening, and lay that night, having made this afternoon five miles. This town consisted of one street of about 600 houses, and was near half a mile long. Tho' it hath the name of a river, yet there is none runs thro' it. The Inhabitants have all their drinking-water from some wells dug at the foot of a mountain or rather long hill at the end of the town. It is clear, but tastes somewhat brackish. The coasts hereabouts appear at low-water to be a soft muddy clay.

Here we were overtaken by the dark but traveled another mile along the shore by the light of the moon, reaching the small city of Kanagawa at nine o'clock. We spent the night here, having traveled five miles this afternoon. This town consists of a street half a mile long with some six hundred houses. The town has the name of a river, but there is none. Drinking water was scooped from several holes at the entrance of the city where the water collected. The holes had been made at the foot of a mountain or long hill. The water was of very light color but somewhat brackish. At the nearby bay, muddy silt was exposed after the water had receded.

6）オリファントの記録した東海道については、「本学蔵東海道関係浮世絵（三）―日本橋から品川宿―」（『東京成徳短期大学紀要』2011 年 3 月）において考察。
7）『川崎市史通史編 2 近世』（川崎市編、1994 年）参照。
8）『川崎市史通史編』（川崎市役所編纂、1938 年）参照。
9）注 7 参照。
10）注 8 参照。
11）原書は、マリオ・エミリオ・コセンザ（Mario Emilio Cosenza, PH. D.）の編纂になる *The Complete Journal of Townsend Harris* : First American Consul General and Minister to Japan, New York, 1930 。訳書に『日本滞在記』（坂田精一訳、岩波文庫、1953 年）がある。
訳文と原文（初版本）は次のとおり。

そこで、副奉行が色々とむつかしい諫言をするのもかまわず、ヒュースケン君はこの土地の旅館を物色するため飛びだしていった。彼はやがて戻ってきて、一軒のよさそうな家を発見したこと。それは場所もよく、きれいで、清潔で、感じのよい家だといった。私は直ちにそこへ泊ることにきめた。副奉行は、庶民の泊る旅館へは行かないでもらいたいと、私に懇願した。しかし、私がそれを望むよりも、むしろ彼の方が自分の宿舎をすてて、彼自身その旅館へ行きたかったであろう。私は彼に、貴君に面倒をかけるようなことはしない。私の威厳に關しては、それは私自身に關する事柄だから、十分にそれを注意するつもりであるといった。そこで私は、萬年屋、すなわち「萬年の幸福」というその旅館へいったが、宿を變えて非常によかった。なぜならば、暗くて、汚くて、不愉快な本陣の代りに、明るく、清潔で、氣持のよい家に入ることができたからである。

…so, after much grave remonstrance on the part of the Vice-Governor, Mr. Heusken

sallied out to look at the hotels of the place. He soon returned with word that he had found a house pleasantly situated and that it was neat, clean and comfortable. I decided at once to accept it. The Vice-Governor implored me not to think of going to a tavern, but, rather than I should do so, he would give up his quarters and go to the tavern himself. I told him I could not think of disturbing him; and, as to my dignity, *that* was my affair, and I would take good care of it. So to the hotel *Mannenya,* or "the felicity of ten thousand years," I went, and a very good change it was, for I had a bright, clean and comfortable house in place of the dark, dirty and uncomfortable *honjin.*

12）アンベールの記録した東海道については、「本学蔵東海道関係浮世絵（二）―日本橋界隈―」（『東京成徳短期大学紀要』2010年3月）において考察。

訳文（『アンベール幕末日本図絵上・下』新異国叢書14･15、高橋邦太郎訳、雄松堂出版、1970年）と原文（初版本）は次のとおり。

われわれは茶屋の万年屋で一休みすることにした。この店は往来の客を迎えるために、入口は大きく、正面も両側もすっかり開放されていた。部屋には、いろいろな旅人が坐っていて、畳が見えなくなっていた。奥の間仕切に竈があり、湯気のたっている鉄瓶がかかっており、棚には、食器や食料が載せてある。はしっこい女中たちが右に左に駆けずり回って、しとやかな物腰で、漆塗りの盆の上に、茶椀や、酒の盃や、魚のてんぷらや、菓子や、果物を載せて給仕している。入口の前の、大きくて低い床几の上には、職人や人足がいたが、いずれも扇で仰ぎ、女たちは彼らのために、一つしかない火鉢で煙管に火をつけてやっていた。

On fit une halte à la maison de thé de Manéïa, toute grande ouverte, sur la façade et les deux ailes, à une foule d'allants et de venants ; les nattes disparaissaient sous des groupes pittoresques de convives accroupis ; la paroi du fond était occupée par les fourneaux, les bouilloires fumantes, les étagères d'ustensiles et de provisions ; d'alertes sommelières circulaient à droite et à gauche, distribuant avec grâce les plateaux laqués chargés de tasses de thé, de coupes de saki, de poissons f'rits, de gâteaux et de fruits de la saison. Devant le seuil, assis sur les larges et courts reposoirs de l'auberge, des artisans et des coulies se donnaient de l'air avec l'évontail, et des femmes allumaient leurs pipes au brasero commun.

13）注7・8参照。

14）本文（日文・英文）引用は、『締盟各国条約彙纂』（外務省記録局、1884年）による。

15）小松修「幕末横浜在留外国人遊歩地と見張番屋」（『史叢』31、1983年5月 ）参照。

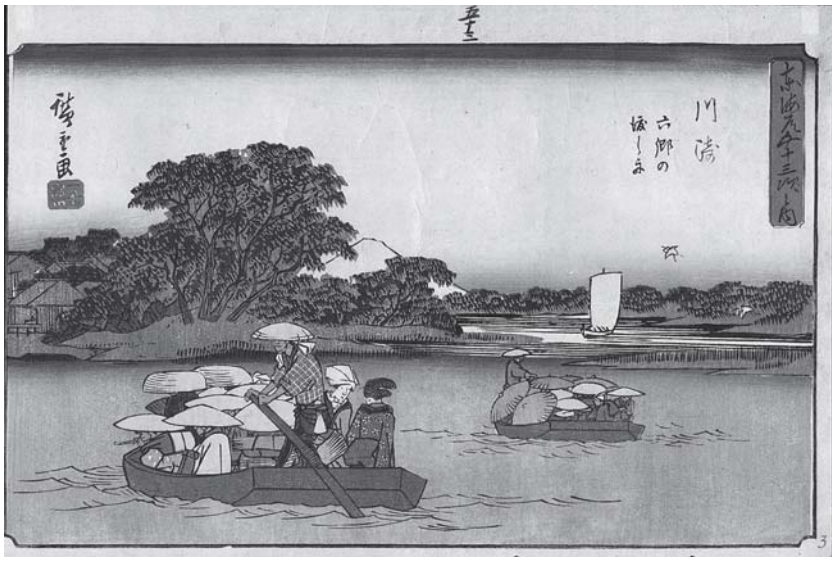
16）注8参照。

17）注8参照。

18）注7参照。

19）注7参照。

20）江戸時代中頃の渡船場の様子は、明和2年（1765）3月作成の「川崎宿船場絵図」（川崎市市民ミュージアム蔵）に詳細に描かれる。注7および『川崎市史資料編2』（川崎市編、1989年）参照。

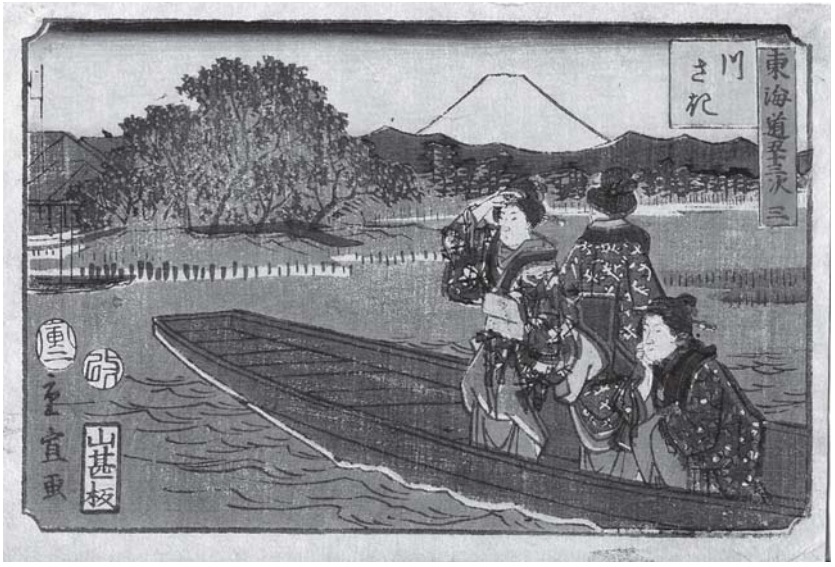


①歌川広重〈初代〉
「東海道五十三次之内・川崎・六郷の渡し舟」
判型　間判横
落款　「広重画」「一立斎」
※天保 12 年（1841）頃

②歌川広重〈初代〉
「東海道五拾三次・川崎」
「春園静枝　春霞ともに立出てめをとはし　わたりつるみの心のとけし」
判型　中判横
落款　「広重画」
版元　「佐野喜」（佐野屋喜兵衛）
改印　「極」(天保 12 年・1841・頃)

③歌川広重〈初代〉
「東海道・三・五十三次之内・川崎・六郷の渡」
判型　中判横
落款　「広重画」
版元　「蔦屋」（紅英堂・蔦屋吉蔵）
改印　「濱」「衣笠」(弘化４年～嘉永５年・1847 ～ 1852)

④歌川広重〈初代〉
「五三次・川崎」
判型　中判竪
※嘉永５年（1852）頃



⑤歌川重宣

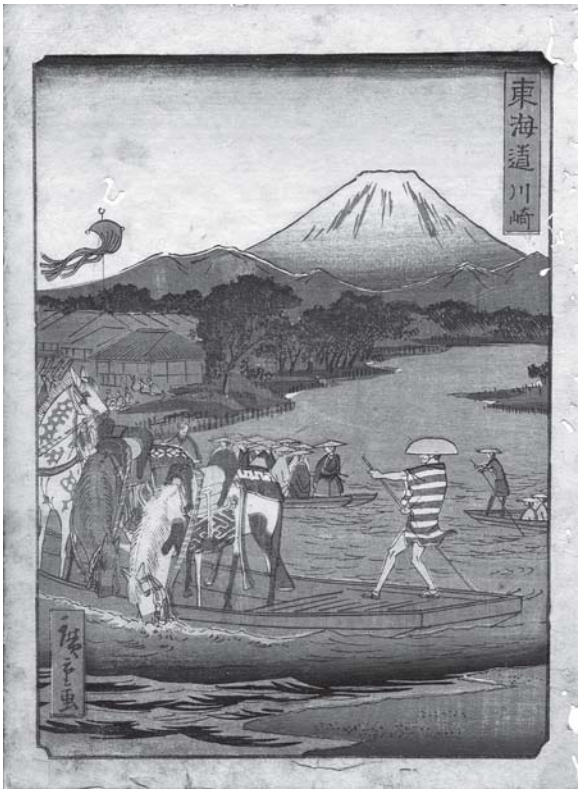
「東海道五十三次・三・川さき」

判型　四つ切り横

落款　「重宣画」

版元　「山甚板」（山城屋甚兵衛）

改印　「改」「寅二」（安政元年・1854・2月）



⑥歌川広重〈二代〉

「東海道・川崎」

判型　中判竪

落款　「広重画」

※文久３年（1863）カ